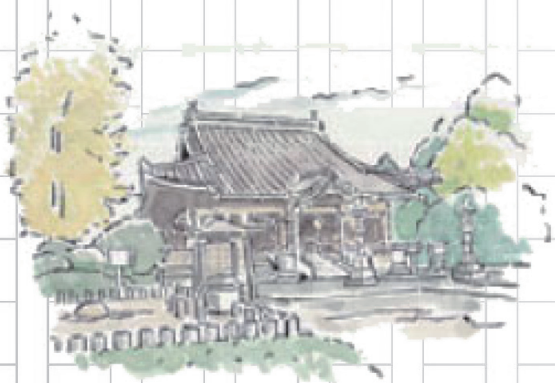


山田寺からの手紙



高松洋子



ひとり暮らしの洋子の耳に聞こえてきたラジオの声は、奈良大和路の観光案内らしい。

近鉄桜井駅から南へ車で十数分、阿部に山田という村がある。

そこに日本で一番古い山田寺があり、今は参詣する人もほとんどいないが、たまに大学の先生たちが研究に訪れたりするらしい。ハイキングやウォーキングには適したコースで、天気の良い日にのんびりと訪ねて行くのもよらしい。

「これはええこと聞いた」

歴史好きの洋子は、さっそく天気も良かったので、運動靴を履き、愛用の手押し車に手提げ袋をぶら下げて、張りきって家を出た。

桜井駅に着いてからは、少しつまさき上がりの道が続く。菜の花と蓮華の花が一面に咲いている。今の鳴き声はひばりだろうか。

溢れ出すようなまぶしい光に、新緑の若葉が照らされて、洋子は深く深呼吸をした。むせ返る甘い花の香りで頭がくらくらとする。

風もなく時間がいつからかずっと止ってしまったような、そんな感じの静けさである。

田んぼの中に立って、洋子はしばらく辺りを見回してみた。ずっと先まで見渡しても、車はおろか人影すらない。肝心の山田寺らしき寺もどこにも見当たらない。



公共の電波であるラジオが、でたらめを言ったのか。そんなわけはないだろう。私の頭がまた少しおかしくなってきたのかとがっかりしていると、ふとそこに石碑らしいものが見えた。

駆けよってみると、山田寺跡と書いてあった。建物はすでになく、ここに山田寺があったということか。ラジオはちゃんと「跡」と言ったのに、自分がそれを聞き逃したのかもしれない。山田寺があったとわかっただけでも来た甲斐があったでないか。そう洋子は自分に言い聞かせて帰ろうとした時、向こうから一台の自転車がこっちに走ってきた。

それまで田舎道を歩くのは自分一人だったので、洋子は内心ホッとした。当然相手の自転車がよけるか、止ってくれるだろうと思って、洋子はハンドルを握ったままその場にじっとしていた。ところが自転車は手押し車にぶつかって、洋子が手を放した瞬間に、田んぼの溝に落ちてしまった。

その男性は慌てて乗っていた自転車から飛び降りた。

「あっ、えらいこととしてしまいました、すみません。私さえずぐに止っていたら、こんなことにならなかったのに」

麦わら帽子をかぶった男性は、ぺこぺこ何度も頭を下げた。帽子でよく顔は見えなかったが、どこかで会ったことがあるような、上品な顔立ちの老人である。すぐに田んぼの溝から手押し車を引き上げてくれた。

「私の方こそほんやりしてすいません。山田寺をひと目見ようと勇気を出してきたのに、どこにもそれらしい寺がなくて……。ラジオでは確かに聞いた気がしたのですが、なんだかキツネにつままれたようです」

洋子は手提げ袋からタオルを取りだして、汗を拭きながらその老人に聞いた。初夏の畦道はかなり暑くなっていた。日差しをさえぎる木々もない一面の菜の花畑の中である。洋子は歩き疲れたせいもあって、思わず畦道にかがみ込んだ。

「大丈夫ですか。わざわざ訪ねてこられたのにそれは残念でしたね。だいぶお疲れのようですから、私の家で少し休んで行かれませんか。お詫びの印に、冷たいお茶でもいれますので、一服していってください。さあさあ、その角を曲がるとすぐですから」

白髪が春の陽光の中でキラキラと輝き、日焼けした柔和な顔立ちのその老人は、熱心に洋子を誘ってくれた。

「でも、突然押しかけたら家の方にも迷惑をかけますし、私ならこの通りケガもしていませんので、ご心配には及びません」

さつきから咽喉も乾いていたのでその誘いに心が動いたが、ヨイシヨと言つて立ち上がると、洋子は光の中で輝き出した手押し車を引いて、来た道を歩き始めた。「私はずっと一人暮らしですから、誰に遠慮もいりませんよ。山田寺のことでもゆつくりお話しして差し上げましょう」

後ろから追いかけるように老人が声をかけた。せつかく来たのにこのまま帰るのも口惜しい。山田寺がすぐそこに、本当は今もひっそりと建っているような気がして、なんだか後ろ髪を引かれるような思いだったので、洋子は自転車の後について門を入つて行つた。

作業着のズボンのポケットから鍵を出して玄関を開けているのを見て、老人も本当に一人暮らしなのだと思つた。ただ、老人とはいえ、見知らぬ男性の部屋に一人で入つても良いのだろうかと少し躊躇したが、まあここまで生きたら、「年齢に不足はないだろう」とふいに昔、年寄りから聞いた言葉を思い出した。

ご親切にありがとうございます。それではお言葉に甘えてお邪魔しますと言つて洋子は土間に入つていった。



質素な暮らしぶりが伺える、かなり古い家である。それでも天窓があるせいか、たっぷりと自然光が注ぎ込んで、広い居間は電気をつけなくても明るかった。壁には画用紙に描いただけの絵が、無造作に貼ってある。

部屋の中央には、一人暮らしには少し大きな椋の木の楕円形のちゃぶ台があった。その上にも、絵の具を塗り始めた描きかけの画用紙や色鉛筆などが広げられて、かなり部屋は雑然としていた。

老人は上田清治郎、大正十二年生まれで、生え抜きの山田っ子だとちゃぶ代の上を片付けながら名乗った。

「生え抜きですか」

洋子は勧められた座布団に正座した。

「そう、この地に生まれて、ずっとここで生きてきました。けど、物心がついた頃には、寺はもうありませんでした。年寄りに聞いた話によりますと、藤原時代、仏教伝来によって建立されたもので、百体に及ぶ仏像や目くらむばかりの黄金のお御堂は、それは素晴らしいものだったということです」

持統天皇が無実の罪で無念の最期を遂げた御父、倉山田石川麻呂の霊をなぐさめようとして建立され、知られている中では日本最古の寺ということである。

香久山の東から桜井にかけて、当時は文化の中心で、その象徴がこの山田寺であった。それは、明治時代、排仏毀釈によって仏たちは捨てられ、大正時代に老朽化した建物も壊されて今のカタチになったという。

清治郎の説明はとてわかりやすく、洋子は山田寺跡についても納得した。

「この家も建て替えながら何百年も続いてきた旧家ですが、ご先祖の誰かがめざましい活躍でもしてくれていたなら、歴史の教科書に載せてもらえたかもしれませんね。時々そんな空想をして楽しんでるんですよ」

若いころに一度だけ見合いをしたが、結婚する機会を逸してしまって、ずっと歴史の教師をしてきたという。夫に先立たれた妹と長らく暮らしていたが、その妹もだいぶ前に亡くなったと、身の上話しもしてくれた。

自分は三つ年下の大正十五年生まれ、高木洋子ですと自己紹介をすると、妹と同じ歳だと清治郎は嬉しそうに応えた。

「さすがに歴史の先生をしておられただけあって、説明が上手ですね。私も上田先生に習いたかったな」と何げなく言った時、洋子ははっとした。

もしかしてあの上田さん？ まさかそんな偶然はないだろうと思いながら、洋子は熱心に話す清治郎の横顔をじっと見つめた。

「香久山は 畝傍を雄しと耳梨と 相争ひき神代より かくなるらし」と清治郎が諳んじると、「いにしへも 然なれこそ うつせみも 妻を争ふらしき」と洋子が続けた。

清治郎は「そうそう、話に夢中になって」と言って立ち上がると、お茶とお菓子を盆に載せて戻ってきた。土産にももらったという、名物の三笠まんじゅうを勧めながら

「ほらこの絵を見て下さい。三つの山が描かれているでしょう」と言った。

洋子はまんじゅうの透明の包み紙に書かれているその絵と文を声に出して読んだ。

大和にはむらやまあれど、とりよろう 天の香久山のぼり立ち

くにみをすればくにばらは けむりたちたち うなばらはかまめたちたつ

うましくにあきつしま大和のくには

いつの間にか清治郎も一緒に声を揃えて読んでいる。お茶をお替わりしながら、二人は神話から古事記、万葉集と記憶の糸をたぐり寄せあつて知っている歌を次々に披露した。こんなに会話が弾むことなど久しくなかった洋子は、すっかり万葉人になったようで、とても幸せな気分になった。

「大和平野は神武天皇が諸国を平定してここはくにのもなかぞ みやこせんとおおせられた日本の始まりの地です。私はここに生まれたことをずっと誇りに思っていました。大和三山の妻争いの歌はなかでも好きな歌です。神代の昔から恋敵がいたからこそ、男と女は情熱的になれたのでしょね。私にも実は、この歌にまつわる思い出が少しだけあるんですよ、聞いてくれますか」

清治郎はそう言って、奥から截金で作られた立派な手文庫を持ってきた。



その時に玄関の扉がいきなり開いた。

「先生、紙芝居」「いなばの白うさぎや」

「昨日の続きやって」

五、六人の小学生位の子ども達が、口々に大きな声で言いながら入ってきた。

「今日はお客様が来ているから、紙芝居はまた明日や。みんな、ごめんな」

「なんだあ、つまんないの」「明日やて」

子供達が部屋から出て行くと、清治郎は洋子にその紙芝居を見せてくれた。

因幡の白うさぎや大勢の神様が笑っておられる姿、天岩戸と思われる絵の後ろには、それぞれにきれいな字でお話しが書いてある。すべて清治郎が描いた絵と文だという。

「紙芝居なんて、今どきの子供には珍しいから結構楽しみにしてくれているのですよ」

「天岩戸のお話しなんて、私も聞きたいですね。もうすっかり忘れてしまいました。ところでさつき先生がお持ちになったのは？」

洋子は手文庫の中身を見たくてうずうずしていた。清治郎が蓋を開けると、所々変色した色褪せた和紙の便せんが入っていた。清治郎はそれを洋子に渡した。

筆で書かれたその手紙に洋子は見覚えがあった。書き出しはそう、香久山はから始まる妻争いの歌である。

「清水の流れるような仮名の筆使いに、私は感銘を覚えました。恋の歌を冒頭に引用して思いを一気に書き記した手紙の文面には、溢れる情感や知性が滲みだして、胸を打たれました。今も大切にしている宝物です。この手紙をくれた人ももうこの世にはいないと思いますが、もし向こうであつたら私はいろいろと話したいことがあります。一緒にはなれませんでした、ずっと大切に思ってきたことを伝えたいのです」

清治郎は自分に言い聞かせるようにそう語った。

洋子は黙って自分が書いたその手紙を読んだ。事情があつて結婚できないという主旨のことが書かれている。

当時、洋子は大阪の書家の元に弟子入りしていたが、戦争が激しくなつて桜井の実家に返され、そこで終戦を迎えた。

その頃に親から見合いを勧められた相手が清治郎だった。お互いにひと目で魅か

れあったが、洋子に懸想していた親類の男が、彼のことを未亡人の教師と深い仲で、地元では大層評判が悪いとでたらめを言いふらしたために、妹たちの縁談に差し障るという理由で、逆に親から猛反対を受けていた。

そんな事実などなかったことは、だいぶ後でわかったが、洋子は親が勝手に決めてしまった別の縁談を、どうしても断わりきれずにすぐに嫁に出された。

蒸し暑い夏の夜、かやの中で何度も書き直して書いた初恋の人への手紙だった。別れの理由は決して書くまい。清治郎を信じようと心に誓っていたから、辛い思いを香久山の歌に託して吐露したことを、まさに昨日のこのように思いだした。

その手紙の最後には、書家として精進したいことと、いつの日か、万葉集や古事記、歴史の話をお茶でも飲みながらゆっくりと聞かせてくださいと書き記して結んであった。洋子が今読んでも胸を打つ手紙だった。



半世紀以上も前にたった一度会ったきりの見合いの相手に、こうして出会って静かに向かい合っている。もしもこの人と終生過ごせていれば、どのような人生を送れたただろうか。その思いは長い人生の中で幾度か脳裏をよぎった。それがこうして現実になって目の前に清治郎がいる。

「こんな古い手紙をずっと大事に持っていたのですか。先生は物持ちがいい人ですね」

洋子は動揺を悟られないように軽口を言って、入れ替えられた冷たいほうじ茶を一気に飲んだ。

「当然ですよ。私が一番大切にしている手紙ですからね。そうそう、その女性も洋子さんという名前でした。見合いの席で二人はずっと万葉集の話をしていたんです。こんなに話が弾む女性は今までにいなかったの、私はすぐに気に入ったのですが、この手紙の最後には、書家として独りで生きていくと書いてあったので諦めてしまったのです。もう数えられないほどの昔の話ですよ」

三輪の大神神社の鳥居をくぐると、近くにほこらがあって、そこにはいつも卵やお酒を供えているのはご存知ですかと、清治郎は手紙をもとの手文庫にしまいながら、突然洋子に聞いてきた。

ほこらには、蛇がいるのでお供えしていると聞いていましたが、蛇の姿は見たことがありませんと、洋子も静かに答えた。

大神神社のご神体は三輪山ですが、ごさいじんは大物主命という神様です。神代の時代にこのあたりに「ものその姫」という美しい姫が住んでおり、あまりの美しさにいい寄る神様が多く、その姫の親神様は姫の周りに二重三重にかこって誰も入って来られないようにしていました。

ところがある夜のこと、雲の合間から一人の男の神様が入ってきました。それ以来姫のお腹がだんだん膨らんでいくではありませんか。親神様が聞きただと、姫は顔も見たこともありませんと答えた。

よし、それなら考えがあるぞ。糸車を作っておきなさい。今度その神様がきたら、針にその糸を通してお召し物の裾に縫い付けるように命じました。ある日、糸車は回って、相手の神様の館までついていくと、なんとそこにはとぐろを巻いて、一匹の白い大蛇がいたというではありませんか。

姫はそれを知って悲しみのあまり、箸を女性の一番大事な、子供を宿すところに

差し貫いて自殺してしまいました。亡骸は、箸と共に近くの小高い丘に葬られ、それ以来その村は、「はしなか村」と言います。この塚を、はしなか塚と言って、山辺の道から見えるんですよと清治郎は、塚の由来を面白く話してくれた。

「そういうえば女学校時代、はしなか村から通っていた友だちがいました。『山鉄』という足の遅い電車に乗ってくるので彼女はいつも朝礼に遅れてきていました(笑)」

「足の遅い電車というのはまた面白い表現をする人ですね、洋子さんは。ところでこの話は見合いをした時にもしたのですが、その洋子さんという人も、同じようにはしなか村の遅刻の常習犯の話をしてくれました。女学校のお知り合いですか、それともあなたが……」

「……」

洋子が真剣な顔で聞く清治郎に何か言おうとした時に、柱時計が先に四時を打った。

「ずいぶん長居をしましてすみません。あまり先生のお話しが面白いので、つい聞き入ってしまいました。これも山田寺のお導きかもしれませんね。はるばる訪ねて来た甲斐がありました」

洋子は古びた時計を見上げながら言った。

「そうですか。いつでも歓迎しますよ。九十歳になっても面白いこと、学びたいこと、わくわくすることが私にはいっぱいあります。生かされていることの有り難さを、いつも心で感じながら今日一日を楽しく過ごすように心がけています」

清治郎は先に立ち上がりながら、洋子の手を引いて立たせてくれた。手のぬくもりが伝わってきて洋子は涙が出そうになった。

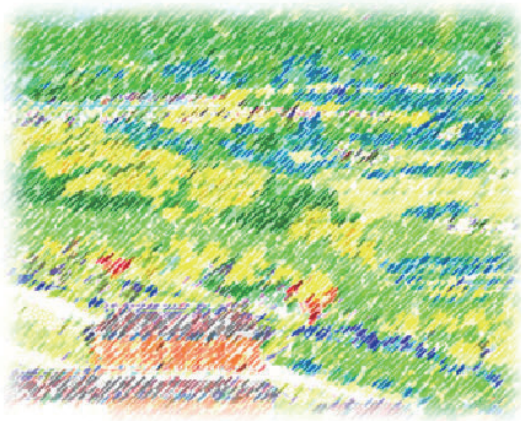
「次にはぜひ山辺の道をご案内しましょう。ずっと一緒に歩いてみたいと願っていたのです。あの手紙をくれた洋子さんと。二人で歴史の跡を訪ねながら、万葉の里を歩き回ることを想像しただけでワクワクしてきます。木漏れ日の中を歩くと、心がとろけそうになっていきますよ。あの世に一つ持っていけるとしたら、私はこの新緑の青葉を冥土の土産にしたいですね、ほら」

そう言いながら清治郎が玄関を大きく開けると、宝石のような新緑の青葉が、洋子の目に飛び込んできた。

「冥土の土産ですか。それなら私は今日先生に見せてもらったあの手紙を、洋子さ

んに持つていくことにします。こんなに大切にしてもらっていると知ったら、どんなに喜んでくれることでしょう。山田寺からの手紙です。今日は出かけてきて本当によかったです。ありがとうございました」

洋子はこのまま帰らずにずっとここにいたいと思ったが、青葉の美しさに引かれるようにして外に出た。黄昏前の一瞬の輝きが、まだ少しそこに残っていた。



「高木さん、高木さん、そろそろ起きて下さいよ。おむつを替える時間ですからね。ラジオをかけましょうね。そうそう、上田先生は昨日も夢の中に出て来てくれたのかな？」

優しく声をかけてくれるのは、身の回りの世話をしてくれる藤井さんだった。

洋子は介護ベッドでいつものラジオを聴きながら横たわっている。その周りには田舎の小間物屋さんみたいに、身の回りのモノが並んでいる。

手も足もほとんど動かない。おむつを替えてもらい、食事を作ってくれるヘルパーさんたちがこない、洋子は自分では何一つ出来ない日々が続いている。寝たきりになってからの三年は、本当に辛く長かった。早く迎えが来ないかとそればかり願っていた。

ところが山田寺の手紙を見た翌日からは、天井のシミを数え、ラジオだけが話し相手だった毎日が、まるで違ってきた。清治郎が時折現れて、ベッドの横に座って洋子の話や歌を聞いてくれるようになった。洋子は毎日新しい話題を考えて、米寿の落書き帳と記したノートに書き留めている。

「オリンピックの応援歌」というのも、洋子がベッドの中で作詞作曲をした歌である。

♪

地球の上ののぼってみれば

太平洋の島々は

さくらさくらの花盛り

くるりまわれば大西洋

大船小舟ゆきかえり

青き白きは波しぶき

ハンカチ降りてこんにちは

グッドバイバイゆくさは

月へ月へと新婚旅行

宇宙の彼方に聞こえるは

オリンピックの応援歌

世界一れつ手をつなぎ

仲よい国になりましょう。

なかよしこよしになりましょう。

とりとめのない話は、子どもの頃の思い出が多かった。清治郎が真剣に聞いてくれるので洋子は楽しくて仕方がない。天気の良い日は清治郎と弁当を持って出かける。学びたいことがまだまだいっぱいある。面白いこと、ワクワクすることが次々に出てくると洋子も清治郎のように考えるようになっていた。

「洋子さんの愛用の手押し車は、魔女の箒の杖のようなものです。それを押してゆつくりと歩けばいいだけ。私の自転車も同じ。これさえあれば二人はどこにでもいきます。私達のふるさとであるこの万葉の里を、これからくまなく歩いて回りましょう」

洋子はベッドの中にいながら、今日も手押し車を押して、先生の自転車と並んで大和路の散策に出た。自由に伸び伸びと歩く洋子の足取りは、驚くほど軽やかであった。

終わり



(あとがき)

ベッドの生活になって十年、寝たきりになって三年が過ぎた頃、次女が楽しみをみつけてくれました。それは小説を書くことです。寝たきりになると妄想が膨らみます。若い頃に書家を目指し、ずっと書道を教えてきた手もほとんど動かないので、最初は娘がきた時にテープに吹き込ませてもらっていました。でも文章にして残したいと思って字の練習を始めました。カタカナなら書けました。左から幼稚園児のような字で書いているので誰も読むことが出来なかったのですが、ようやく一つできました。

「山田寺からの手紙」は、毎日聞いているラジオをヒントに書きました。

歩けなくなってから自分の足で歩くことをいつも夢想していました。手押し車は、魔女の箒の杖のようなもので、それさえあればどこにでも自由にでかけられます。自分の青春時代の一コマと、九十になっても学びたいこと、ワクワクする面白い事がいっぱいあるということを書き、書いておこうと思いました。

「感謝」

平成二十五年十二月一日

高松洋子



(筆者近影 寝たきりの状態で原稿を書く)

生年…大正十五年一月十一日生まれ(八十八歳)

連絡先…

〒634-0009

奈良県橿原市中町297

0744(22)4775